

文宣王—孔子の
大野—地名、魯
哀公十四年西大
野に狩し麟を得
し由左傳に見ゆ

火甲—燧火
變たる君子云々
—文明の君子の
遊獵を云ふ種も
遊ぶに同じ、一
遊—種爲諸侯
度(孟子)
明方—開くにか
く

列卒—人足
まとひ—陣所の
目標
笠印—兜の後に
つくる旗
袖印—袖に付く
と布帛

の種類、つみ雀
鶴えつさい雀
さしげ鶴
兄鷹はやぶさ
このり兄鷹

三千餘居—三千
餘羽

百 日 曾 我 (一名團扇曾我)

第 一

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解に曰、麟は徳を以して形を以てせずと云々。麟は仁獸にして生るをくらはず、生草を踏まず共いへり。道ある君が御狩場や、麒麟を得ずといへども、農業をさまたげず。民をたすけて山田もる、火中の光り明々として、斐たる君子の一遊一豫。國をなびかす旗棹の、直なる掟樂しめり。維時建久四年仲夏下旬、征夷將軍頼朝卿、富士の御狩の當日を、待つも程なきみじか夜や、御發向は寅の一點。かり屋の木戸も明がたに、御出馬の御ふれあり。呢近外様の大小名、狩裝束に美をつくし、列卒の人数は所領の高下、面々持の場所に、まとひを立て組子には、思ひ思ひの笠印袖印。扱御鷹はつみゑつさいさしばしやう隼このり、鷲、鷹、はくてうとりの朝鮮鷹、そろへて三千餘居なり。逸物の犬唐犬、是も同じく三千疋。馬くら

ちんじなば―許
りて申さば

皆具かいくのきらかざり。花と紅葉をむさしのに、一どに詠ながむる如くにて、御感かんは斜なまめならざりけり。こよに信濃國しなののの住人海野せうじんうのの小太郎行氏ゆきうぢ、八十計りの老入道らうにふだうを御前にひつすへ申す様やう、「たゞ今御狩屋みかりやへ參勤仕る所に、此入道弓矢たづさへほのぐらきに、御かり屋の邊忍へんんで徘徊はいくわいいたす體たいさながら山賊強盜さんぞくかうたうとも見へず、必定平家の餘黨ひつていやうと存じ、早速召とり候さつそくきつと御糺明有きうめいべし」とぞ申しける。頼朝聞し召めし、「先年大佛供養くやうの時、惡七兵衛景清かきよが、頼朝を狙ねらひしためしもあり。いか様をのれ仔細さいし有にまぎれなし。まつすぐに白狀はくじやうすべし。ちんじなばがうもんせん。いかにく」と仰せければ、此入道ちつ共おくせず「今は何をかつよみ申さん。某それがしは一とせ奥州衣川あうしうころもがはにて、御はら召れし九郎判官義經きよなるの家臣かじん、武藏坊辨慶べんけいが父、くまのの別當辨眞べつたうべんしんが生残りたる身のはて候。忝かたじけなくも我君今天下わがきみけんてんかの武將ぶしやうとあふがれ玉ふは、全く判官殿はんくわんでんの戦功せんこうなるに、讒人ざんにんの口によつて、一日も安堵あんぞの思ひなくうしなはれさせ玉ひ、子にて候辨慶べんけいも、めいどの御供仕りぬ。せめて無念むねんをはらさん爲ため討死たうししたる御家人共みけにんが、うみすてし子にても候はば、幼少成共えうせうかりあつめ、心計りのとぶらひ軍いくさ、仕つかまつらんする血まつりに、先讒者まづざんしやを一矢と心がけ、忍しのびよつたる甲斐かひもなく、海野とやらんに見付みつけられ、白狀無念はくじやうむねんの至りなれ共、君故きみこすつる老の命おい、とくく首くびを召

されよ」と、返答すどしく申しける。頼朝聞き玉ひ、「是一應の事ならず、後日に評議有べき條、先それ迄はいたはれ」とて、和田の義盛に預け置かれけり。時に工藤左衛門祐經すゝみ出、「誠に彼法師其まゝ置かば何ごとか仕出し、御遊興のさまたげならんに、いしくも仕つたる海野の太郎、御ほうび下され然るべし」と取なせば、君御悦喜の餘り、「チ、尤々。何にてもほうびを望め」と仰せある。海野面目ほどこし、「御詭冥加に叶ひ候。然らば御ほうびの御名馬みちのくより召されたる、松島月毛を賜はりなば、千町万町の御加増にも、まさりて悦び奉らん」と、申しもはてぬに祐經、「チ、何しに御意に異變あらん。誰か有、馬引け」と取持所へ、新田の四郎忠常、はどからすつツと出、「暫らくく、工藤殿。彼御馬にはいひぶん有、某先年富士の人あなへ入り、御褒美望めと有し時、松島月毛拜領を願ひしかど、御出陣の召料とて、某願ひかなはぬ所に、老ほれのやせ法師召とつたる御ほうびとて、只今海野に賜はつては、忠常が武士道立がたく、且は上の御依怙にあたり、よしそれとても工藤殿の御取持にて、是非海野に下されなば、某も思案候が、御返答承らん」と、色をちがへて申ける。祐經ゑせ笑ひ、「緩怠なり忠常、以前は以前今は今。御邊が望みあればとて、日本の武將として、誰に恐れて御詞をたがへらるべきぞ。此祐

豊守白山一弓矢
八幡といふ如く
神に誓つて決心
する詞

無念一無思慮

經が取持にて、海野に拜領せさせんが、して御分が思案とは、どふした思案聞ん」といへば、思いや只思案迄もなし。彼御馬を胸中より二ツに切り、先は某頭の方、海野にはともの方、御ぜんにて半分づつ、切取なり」といかりける。海野もせいて膝立なをし、「某が拜受の御馬半分づつ切取とは、愛宕白山ゆびもさよば、堪忍せぬ」とつめかくる。忠常も刀に手をかけ、「ヲ、サ拜領したくばしても見よ。すは八幡も照覽あれ。馬人共に一うち」と、三方論議の意地づくは、あやうくもはれがましく、をのく手に汗にぎりし時、大將扇を上玉ひ、「新田も海野もしづまれく。是は双方道理にて、頼朝が無念なり。先彼馬を只今は頼朝が預りたり。二人共に今迄に、一度づつのほまれあり。是より後兩人のうち、二度づつの手がらをして、以上三どの高名あらん者に、相違なくとらすべし。此詞いはらば、氏の神の御罰をえん」と、忝なくも御大將、御誓言有ければ、二人はあつと頭をさけ、恐れ入たる禮儀のてい。大將軍の御了簡、をのく感ずる計りなり。重ねて仰出さるとは、頼朝今辨真が詞によつて案ずれば、平家の餘類を始め義經の家人等、錦戸が一族伊東入道が末葉なんど、頼朝に恨有者多かるべし。敵の末は根をたつて葉を枯せ」と傳へたり。新田海野にいひ付る。「父親しれぬをさなき者を、尋ね出して吟味せよ。大磯小磯の

をなご力云々
かよわき女の力
にて馬行きか
ぬる

遊君はいふに及ばず、其父分明ならぬ子は、懷妊たりとも腹をさき、きつと詮議を加ふべし」と、仰せきびしき御狩場の、番手々々の槍印、御馬印の目に高き、富士の裾野に出玉ふ。新田の四郎忠常は大事の仰せを承り、「あはれ然るべき御敵の末を詮議仕出し、高名三度の數を合せ、松島月毛を拜領し、海野工藤に手がらを見せん」と、駒をはやむる大磯の、波こよもとや並木のかげより、わかき女のつよと出、「是申し新田様、お侍と見受たり。少頼み度事あり」と、轡づらしつかと取る。をなご力も駒なづむ。郎等共立さはけば、新田もとよりさる者にて、「さなせそく。見かけて頼むと有からは、聞届では通られず。シテ女郎仔細によつて頼れふが、無心とは何事」とあれば、女「先以て忝なし。其お詞は違ふまいな」思ハテ疑はしくば誓文立ふか」を「イヤもうそれ迄も及ばず。さあらば語り申すべし。みづからは、今朝御狩場にて海野殿にとらはれし、入道が娘花野と申す者にて候。そも其入道が、むさし坊辨慶が父辨眞と名乗しは偽り、實は曾我の兄弟の下人鬼王團三郎が父、津藏の入道と申す者。御主の敵祐經に、一矢と思ひ忍び入、思ひの外に召とられ候を、御前にて「鬼王團三郎が親」と、有のまよに名乗なば、御勘氣の曾我殿の大事と思ひ名をかくし、辨慶が父辨眞と、あらぬ事を申せしと存するなり。夫につけて鎌倉殿よ

どうこけてーど
う軛がつて

り、父親しれぬ子のあらば、懷妊成とも腹をさき、詮議せよとの御説を、承り玉ふとかや。頼み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々は、浪人のつれづれに、折々の色里通ひ、なじみのかたも有と聞ば、遊女のはらに情のたねのやどるまい物でなし。よし其事はかまはね共、それからそれがどうこけて、御兄弟の御身に、萬一お祟り有る時は、もとみづからが親入道が、仕損じより事おこる。是をあはれと思召し、御聞とゞけ候ひて、もしも曾我殿の子だねなど候はば、御了簡頼み奉る」と、理をつくし事をわけ、手を合せてぞなげきける。新田聞もあへず、「扱はお事はきよ及ぶ鬼王が妹。今朝の入道も辨慶が父とは偽り、鬼王兄弟が親なるとや。扱々餘儀なき頼み事、心得たりといひたいが、こゝに一ツの難儀あり。海野と某御前にて、松島月毛と云ふ名馬をあらそひ、三度の功名ある者に、賜はらんとの御説を蒙り、兩人が我さきに何をがな功名にと、意地をはる最中、曾我は伊東の末なれば、我君の御あだ、海野に先をこされ、彼御馬をとられては、某腹を切る計り。此事にをいては成がたし。外の事は何成とも、無心あらば聞べし」と、云捨て乗出す。女「なふお情なし」と尾筒を取て引もどし、「御ことわり至極致したり。誠にお侍の手がらにせんと、思召すを止むる不調法。その返禮に進ずる寶の候」と、守りぶくろより

尾筒一馬の尾の
恨もと

奇代—奇代にて
世に稀なる義

聞捨て、云々—
時鳥は啼けばす
ぐ場所を轉ずる
故にいふ
別路—忠實花野
の別る、と遊女
が客と別る、と
取ねていへり
朝顔—化粧した
る朝顔と牽牛花
とを掛く

一つよみ取出し、「是は韃靼國より、渡りたる虎の生爪にて候。死したる虎の爪はあれ共、生爪は稀なる物。誠や虎はけだもの王にして、地を走るけだものおぢ恐るゝは必、わらはが在所、三河國阿部山の狩人、此虎の生づめを守りにかけて狩に出るに、いか成あら熊あらしも、やすく手取にいたす事、猫のねずみを取る如し。是を只今参らせん。御身につけて御狩場にて、猪とも熊とも引くんで、人の及ばぬ手がらを遊ばさば、海野が先はよも越じ。いで、證據を見せ申さん。随分御馬に鞭うち給へ」熊「心得たり」と乗出す。娘はさきに立ふさがり、追戻せばたちくく、とどろくと千鳥足、四足を折つて恐れしは、不思議なりける次第なり。忠常も我ををつて悦び、「奇代の重寶手に入るからは、御狩にて高名し、海野が望の御馬を拜領して名を上ん。此うへは曾我兄弟、いかなる狼藉ありとても、子孫迄も見のがしなり。弓矢八幡大菩薩、此詞に偽なし。お事が父も和田殿と、内通してたすくべし。人見付てはいかどぞ」と、「去ばく」もよそ事に、聞捨て行く時鳥、五月のそらの雨曇りに、まぎれてこそは三重別路の、宵のうつり香燻きしめて、晝まで寝るを作法にて、他ともんちの揚屋町、くつわの亭主下々迄、それをならひに朝寝する。大磯小磯化粧坂、朝がほしらぬ里ぞかし。町のばん太あはたど

胸高―昔は帯の幅も狭く胸高なりし故尻小く見え云々と遊遊笑覽にあり

闇の変や―闇の夜に逢ひしと闇の夜の鳥と破げ次は烏帽子折と速れていへりふくよか―膨れたる

四の二―合せて六になれば云ふしのに物思ふは繁く物思ふ意

敷「何事やらん御詮議とて、新田殿海野殿、御出なり」とふれありく。町の年寄五人組、ねほれ髪に袴肩衣、土にひれふし居たりける。程なく兩人入來り、「此度仔細有て、孕みたる傾城の父親を御せんぎある。少しも偽るにをいては、腹を切さき吟味する。懷妊の傾城共、残らず出せ」と申しける。町人共承り、「懷妊と申しても三四人ならでは候はず。それ先藤屋の竹とり出よ」と云へば、戀には恥ぬ傾城も、包む色にや胸高の、帯でかくすもしほらしく、海野新田詞をそろへ、「汝がはらみし子の親は何者ぞ。帳にしるし鎌倉殿御らん有るぞ偽るな」竹さればとよ、此子の親は京の衆。偶々とは云ながら、勤めではねば眞實の、人めを包闇の夜や、烏丸の烏帽子屋、折様」と云ければ、海野帳にぞとめにける。次に出しは「井筒屋の、ひがきと申す新造」と、傍からいふも恥かしく、打かけの褌打合せ、見せじとすれど振袖の、下よりもるよふくよかさ。「其子が父は誰なるぞ」問はれて顔もあかくなる、「紅葉が谷の客なるが、ひよつと變るなかはらじの、其言の葉ではらみ句や、連教師の山様」と、同じく帳にぞ付けにける。其次は眉目わるく、歩きぶりさへよこ町の、「青柳と申候なり」「扱汝が胎内の子の親は何者ぞ」誓誰と申して我身には、二人の客も荒磯の、荒井の宿の馬かた、本名は六藏、かへ名は四の二物思ふ、流れのうき

身をすててんあるく、或人の申されしは色もかほも、腹も脈も唯ではない。さだめて
く／＼あん、青梅好やらば悪阻でござろ。めいよなふしぎや中戸の豫言が、はや七月」とぞ
答へける。扱其次は虎御前、おめる色なく二人の前に立ちながら、「お尋なれ共みづから
は、懐妊にては候はず。勤めのうさが支へとなり、かゝる病を受候。よし又懐妊なれば
とて、夜なく／＼かはる男の數、どれがどれやらなんの其、夫に覺への有ものか」と、云す
て歸れば海野の太郎、「ヤイ／＼賣女奴待をろふ。ヤアのぶとい奴め、をのれと會我の十
郎こと、知るまいと思ふか。祐成が子に極まつた。サア吐さぬか」とぞおどしける。新田會
我といふこゑに、花野がけいやく思ひ付、忠イヤ海野殿、浪人なれども祐成も侍、推つけ
てさうもいはれず。病とあらば病にして、帳面をすまされよ」といへば、海野聞も入れず、
「宥免するも事による。會我は君の御仇、不吟味には成がたし。腹をさかん」とひしめきけ
る。忠常ちやくと思案を出し、「エ、是非もなし。今は何をか包み申さん。あれは拙者が
子にてあり。某虎に通ひしかど、世間をはどかり、會我と云ふかり名をして、遣手かぶろ
花街中、懐妊する迄かくせしが、手詰なれば打あける。沙汰なしに頼み申す」と、いへば
虎は嬉しく、「ハテ卑怯千萬な。たとへ今死ばとて、夫を今云ふことか」と、詞を合する利

此場をさまし
此場を通して

生爪—領域の心
中に生爪刺ぐ事
箕山大鑑にあり
むさい—憐い
白癩—自誓の詞
(無言集覽)
みじかし—短氣

し、や—征天に
對していふ、狩
に用ゐる天

發さよ。海野かぶりを振て、「おいやるなく。此場をさまし重ねて曾我がのかりとて、一人の手柄にせんたくみ。當座のでき合。但虎となじみの有る、證據はく」とひどく問れて、思ム、シテ證據あらば宥免あらふな。後に否とはいはせぬが」と、詞をつめても證據はなく、心をくだき思ひ付、花野があたへし猛虎のつめ、守りより取出し、「コレ此書付を見玉へ。虎の生爪と書て有、はなしくれたる虎が爪、守りにかけたる間夫おとこ。疑ひめさるは合點々々。今朝の遺恨に胎内の、せがれを殺さふのむさい心底。白癩きかぬ」とぎしめけば、誠とや思ひけん、いきほひにや恐れけん、舞ア、みじかし忠常、證據あれば疑ひなし。帳面もむづかし」と、虎は病にかけ付ける。新田が思案なかりせば、あやうき曾我がの運命なり。かよる所へ海野が方へ、祐經よりはや使—富士野の御狩まつさい中。然るに只今いく年經るともしれぬ猪あれ出、列卒四五十人かけ殺し、各々あぐんで見へ候。御詮議早く御しまひ、此猪とめて高名し、望みの御馬拜領あれ。事急なり」とぞ告けたりける。海野は「あつ」と云よりも、挨拶もなくかけ出だす。をくれじ物と新田の四郎、一散にかけ出で、後になり先になり、足もたぬ走りしは、さながら競馬の三重如くなり。案の如く狩場には、いく年ふりし猪の、牙は劔の如くなるが、しよ矢三つ四つ負

ながら、近づく者を断倒し、おちあふ者を踏ちらし、大きに呀つて巖窟を、こだてにかまへ鼻をふき、寄らばかけんず其勢ほひ。人々馬を立かねて、列卒も亂れてたゞよひける。養由が術、きよりくりうが神變も、かなふべしとは見へざりけり。君團扇をひらめかし、「誰かある。あの猪とめ高名せよ」と呼はり玉へば、武藏の國の住人太樂の平馬の丞、「某とめて御酒ゑんの御着に」と、夕日にかゞやく大太刀かざし出たりける。猪はいはほに身をふせて、飛びかゝらんとする氣色、たゞ牛鬼ともいつつべし。詞には似ざりけり。面もふらず逃てゆく。平馬が姉むこ、愛敬の三郎、熊手引さけかけ向ふ。猪は身をふり飛びかゝり、左手の腕をかけきれば、熊手を捨てぞ入つてけり。安西の彌七郎、「かへせ返せ」と聲をかけ、長刀かまへかけ向ふ。猪はいかつて牙をみがき、唸りてかゝる其聲も、高股をひつかけて、三けん計りふり上しは、鞆の曲ともいつつべし。白杵の八郎景信、つゞいてかゝれば隙間もなく、眉間を二つに引きかけられ、眼くらんで引たりけり。御所の九郎彌五是を見て、大の尖り矢打つがひ、暫しかためて切てはなす。矢よりも早く飛來り、腰のつがひをよこがけに、さつふとかけてぞおとしける。岡部の三郎原小二郎、鎗ひつさけて兩方より、上段下段のつゝみ突き、はつしくと突かゝる。猪は一期の死

あをりー續泥

ちがくー誘引
物ヤレ云々ーさ
もなきものに誘
ぎ立つる

にぐるひ、ひらりと飛んではかつしとはね、くるりと廻はつてちやうどかけ、くるりくはた〜、蝶鳥などの如くにて、退縮けしきの見へざれば、二人もあぐんでさつと引。猪は巖根に身をちどめ、鼻の嵐にたけりをかき、息つぎしたる有様は、すさまじかりける次第なり。新開の荒四郎、「憎し、きたなし、かたぐよ。鬼神にてもあらばこそ、あの畜生を恐れては、誠の合戦なるべきか。某が打ころし、皮引剥いであをりにせん」と、つく棒取のべ打てかよる。猪はにらんで牙をならし、只一かけと唸りけり。此いきほひに恐れをなし、突棒からりと投捨て、鹿垣を推破り、高ばひして逃げれば、數萬の狩人聲をあけ、一度にどつとぞ笑ひける。海野小太郎行氏、眞一文字にかけ來り、「この猪を組留めなば、高名三度にたらず共、御馬を拜領いたさん」と、小太刀をかいこみ躍りかよれば、猪はすかさず一足に、飛ぶとぞ見へしが小太郎が、膝口よりくろぶし迄、まつくだりにかかけ通せば、片足立つてちがくと、列卒の中にぞ逃入ける。今はをりあふ者もなく、いたづらに守り居る所へ、新田の四郎忠常、おくればせに驅つき一あら物々し、仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれ共、猛虎をうつて夫をたすく。たとへ鐵石をまろめたる猪なり共、しや何事が有べき」と、簾竹笠かなぐりすて、「ゑいや

三頭一馬の背の
尻の方
王良—此人の馬
術に達せし事益
子に出づ

さしもの一駒に
かく

兎卒—列卒

おふ」と聲をかけ、二丈あまり飛あがり、向ふさまに乘うつれば、倒にこそ乗たりけれ。猪は乗られていかりをなし、土をけたて木の根をうがち、雲と霞にわけ入て、飛びこへ跳こへ、駟のほりかけ下り、虚空を飛んでまはりしは、周の穆王法の爲、八疋の龍馬に乗じ、萬里を刹那に至りしも、斯やらんとぞ見へにける。新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭、王良がひみつゝの鞭、尾筒を手綱にしつかととり、腰も切よとしめつけく、くつ行勝は山おろしに、さらくさつと斷れてのけば、大童に亂れなつて、只落じく落まじとぞこらへける。小笹茅原巖石枯木、打ちつけく吠りをかき、落ばかけんとあがきしが、仁田は虎の爪をもつ、其威勢にや恐れけん、とあるふし木につまづきて、よはる所を誤またず、差添ぬいてあばらほね、四五枚ばらりとかき切れば、四足を土にふみ入て、立竦縮になる所を、頓てひらりと飛んでおり、數のとどめをさしもの猪、しとめて新田はゆうくと、扇を遣ふて立たれば、大將軍を始めとし、大名小名列卒かり人、足輕荒子一同に、「のつたり新田、とめたり四郎、でかいたく手柄々々、いやく」とつとわめく聲、山もくづると如くなり。頼朝御感限りなく、「新田が振舞、千度百度の高名にもまさりたり。松島月毛をとらするなり」と宣へば、祐經すともみ出、「松島月毛の事は、高

名三度ある者に給はらんと仰せなるに、たとへ鳴雷と組めばとて、三度の都合も合ざるに、忠常に賜はりては、海野の太郎に腹きれよとの仰せかや。先づ此度は御無用と、たつてとむれば力なく、暫先々休息仕れ」と、御本陣に入給へば大名小名人數をまき、皆々かりやに入給ふ。新田の四郎忠常、本意なけに見送り、「エ、につくい祐經、海野とをのれと縁者故、彼奴にほまれを付けん爲、度々我に恥辱をあたふ。出頭一の祐經が首取て、高名三度の都合にせん」と立あがる所へ、若者一人木蔭よりつよと出、「申し、新田殿、前代末聞の御手から、目をおどろかし候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者、先刻くるわにて、虎が難儀を御身に受、救はせ給ふ御懇切、生々世々の御厚恩、御禮申上候」と、かうべを地につけ禮義をなす。虫扱は承り及ぶ十郎殿か。其猪をとめたるも、御家來鬼王が妹、虎の爪をあたへし故。其契約に虎御前を助け候へば、お禮はかはせに仕つる。此爪返辨申す間、花野とやらんに返してたべ。某は祐經めを討たでかなはぬ意趣あり」と、とんで出るを引とどめ、祐經は我々が親の敵。御じぶんに討ては曾我兄弟が侍立ず。しばしの無念をやすめられ、彼奴を我等に討せてたべ。やすくと討おふせらり、切入ん時近所く御には、狼藉入たりと、おり合んは必定。

かり合ふ一犬勢
寄合ふ

かはせ一かへこ
と

千騎万騎が防ぐ共、我々兄弟、ものの數とは存ぜね共、新田の四郎忠常と御名乗を聞な
らば、くびさしのべて討れ申さん。然れば我等も本望とけ、貴殿は三度の高名なり。聞
分てたべ新田殿」と、理をつくしたる詞の末、忠常うなづき、「チ、できた〜面白し。さあ
らば祐經討ち給へ。和殿が首はもらふたぞ」と詰「いかにもやつた、忝ない。それ迄隨分御健
固に、思」そなたも御無事に「詰」お暇申す「思」御ざらふか。「詰」首をとつたりやる迄の、「思」先
是が「詰」お暇乞」と、たがひの一禮こまなくと、ふる五月雨や袖がさの、竹笠取て打かづ
き、新田はかりや、曾我はふせやに立歸る。のべも述たり、こたへも答へた、もののふの、
詞の末は神妙、神妙々々なりとて、後に聞人かんじけり。

第二

蝸牛云々、極めて小なる争に喚ぶ、蝸の左角の蟹國と右角の蟹國と争ふ事、莊子に出づ

己が人に及ばざるをうらみず、人の己にすぐるよをねたむは小人のならひ。されば海野
小太郎行氏、新田と武功のあらそひ、蝸牛の角のつめ立、いどみはけむといへ共、新田が
猪に乗つたりし、功名につどく手ががらもがなと、心は強情に手も立たず、空しく氣根を
ついやしける。もとより祐經縁者といひ、中よしなれば、彼辨慶が父辨眞となのりし津

藏くらの入道にゅうだうを、鬼王おにおうが親おやとは夢ゆめにもしらす。和田わだに預まかけ置おかれしを、工藤くどう祐經すけつね取成とりなりにて、暫しばらく申まをし預まかかり、此こ辨真べんしんを目印めいしんにて、狩場かりばの見物けんじゆ群集ぐんじゆの中なかを、東西南北とうしなんぺい引通ひり、もし見知みちりたる者ものあらば、それぞ義經よしつねのけらい筋すぢ、鎌倉殿かまくらどのの御敵ごてきと、召取めいとて高名たかし、新田にんたが功こう名なをふみつけんと、たくむ思案しあんもまはりどをき、野山のやまを引ひてぞめぐりける。曾我そが兄弟けいは聞き及びき及び、「譜代ふだいの下人げにんを囚人めしうどとなし、なからん後迄あと恥辱ちじよくなり。人も多おほきに和田殿わだどのの、御預ごよりこそ仕合しあせなれ。密ひそかに歎なげき申まをして見みん。去いながら祐成すけなりは人見ひとみしれり。昨今さつこんの元服げんぷくにて、五郎ごろうは見みしる人ひとなし」と、鬼王おにおう兄弟けい妹いもの花野はな、和田わだの假家かりやへ急いそぎける。海手山手うみてやまてをかぎりにて、大垣おほがき亂みだぐる逆茂木さかもちぎ引き、東海東山とうかいとうざん三十三ヶ國さんじゅうさんの大小名おほこゝの、假家かりやのしるし所々ところどころに木戸きどを打ち、御家人ごけにん給人じん商人あきんど見物けんぶつ、行ゆきかふ人ひとにまぎれても、時宗ときむねは此夕このゆふべ、敵討かたきたんと思おもひこみ、眼まなこを四方よつに見みくばりて、案内あんないうかどひ通とほりける。所ところこそあれ海野うみが持もちの木戸きど口ぐちにて、靦面てきめんにはたとあふ。花野父はなの入道にゅうだうを見付つけ、「あれよ」といへば鬼王團三郎おにおうだんざんらう「是こゝはいかに」と仰天ぎやうてんす。入道にゅうだういかつて、「やあ某あいつは見知みちらぬ奴等やつら。何者なにものなればうろたゆる。此こゝの入道にゅうだうに知しられては穿鑿せんさくがむつかしい。早く通とほれ」とつこうどにいひはなす。海野うみさとき男おとこなれば、「イヤまてく、かれらがしかた、兩方見知りふたうみちたるに紛まぎれなし。サア何者なにものぞまつすぐ

給人—扶持米を
與ふる悪人

つこうど—尖聲

女孀—掃除黠油
等を司る女官
お末—女孀の次
に列する女官
頭中將—藏人頭
兼近衛中將
頭辨—同じく辨
官と兼官
儀同三司—准大
臣
衣の欄—京都の
町名、衣にかく
ひさきめ—物賣
女
御影堂—五條橋
の西にあり寺中
に尼多く住し薄
扇を折りて作業
とす(萬葉記)

にいへ。さなくばいつかな後へも先きへもやらぬ」といふ。鬼王兄弟つと出、「御尤千萬、
我らは上方の貧者にてござ候。是成は妹。老ひたる親を養育みの爲、奉公かせぎに方々召
連まはりし時、何かたにてやらあの御坊見たる様に候故、扱只今の通り」といひ捨て通ら
んとす。海野眉をしかめ、「どこへく、シテ其見たるといふは何所にて見たるぞ。胡論な
らば通しはせぬ。勿論もどしもせぬ。搦めをくが、いかにく」と一めんにとり廻す。鬼王
兄弟大事と思ひ、「是は近頃不祥なる所へ参りかよつて候物かな。妹が奉公かせぎの爲、
方々まはりし事なれば、何方とは覺え候はね共、先上方の女のならひ、大内がたを望む
ゆへ、中宮女院仙院十二の對の局々の女孀お末、内侍所への刀自采女、公家に松殿す
すき殿、近衛關白政所、一條殿や九條殿、久我菊亭に花山院、頭の中將、頭の辨、儀同
三司女三の宮、おひくりに御所迄かせぎしが、御所の風にはあはずとて、兩六波羅のや
しきがた、武家は行儀むづかしく、こよもありつき縁うすき、衣のたなや珠數屋町。め
ぐりめぐりて室町の、糸屋組屋ひさき女に、御影堂の扇折、ほね身をくだきかせけ共、都
の奉公口もなく、西國がたへ身をしほる。豊後の國の染殿や、そこをもすでに立わかれ、
因幡丹後の紙すき奉公。それより紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くをしるべに

小歌比丘尼の事、
進比丘尼の事、
歌念佛に解けり

立越えしに、それは小歌比丘尼とて、尼にするよし承り、逗留もせず歸りしが、ヲ、それよ今思ひ合すれば、熊野山のどこやらにて、一寸見たる御坊にて候。サア御通し候へ」と、つよと行かんとする所を、「どつこへく、エ、己めらは痴者かな。要もせぬ長口上、まぎらかして通らんとや。熊野山にて見たるとて、につこらしく云ひまはす。察する所己は義經の家來、熊野の住人、鈴木龜井が一族よな。此辨眞めと心を合せ、鎌倉殿へあだをなす、御敵の張本、からめとつて高名にせん。ソレ脱すな」と、ひしめく所へ五郎時宗編笠取て大手をひろげ、「ヤア權柄な御侍。あの者共は某が、大分の給銀にて召かよへたる下人ども。最前より何れもの我儘、はらわたがもえ返り、胸の蟲がむかくと耐へかねて候へ共、無事にすまば濟さんと、齒をくひしほり控へし所に、理非もろくに聞とどけず、なんじや搦捕んとは、いか様のとががある。さあ承らん。もし科もないに下人をしほりからめさせ、主人の身にて堪忍ならず。町人なれば太刀かたなの、お相手にはかなはず共、腕やすねの力は御侍にも負申さぬ。はりごくら踏みごくらは、此膝骨のくだくる迄」と、すね打たよいて睨め付る。海野ちつ共ひるまず、「イヤこりや若い者、たとへ其方が下人にも主にもせよ。是は頼朝公の御敵。判官殿のゆかりを尋ねもとむる穿鑿な

はりごくら一睨り
睨メ

入道云々此章は安宅の關にて辨慶が義經を打ちたる處の作りかへ、後の傾城諸狀も勳進帳の燒直し

れば、いふても天下の御大事。誰をか憚はばかる事あらん。こいつは辨慶べんけいが親熊野おやくまのの別當辨眞べんしん。それにしたしきものなれば、熊野そだちの鈴木龜井きづまが一族そくならんと、咎とがむるが僻事ひがか。彼奴まやつを下人といふからは、扱あつかは汝は義經の、おとし子の有りと聞しが、それ成るよな。こゝでの論ろんはむやくの事。あやまりなくば御前みまへにて、すみやかに云いひ分わけせよ。御所のかり屋へ同道どうだせん。早はやあゆめさあ來こひ」と、云いはれてさすがの時宗も、御前へ出てはあしかりなんと、返答へんたふち遅々ちぢぢして見へにける。入道是ぞ一大事と思ひ、大おほこゑ上あて氣色をかへ、「扱あつか々々をのれらは何者なれば、何の用もちもなき事を、仔細しさい有あけに云いひなすゆへ、科こもなき判官殿、彌々いよいよ御ごとが深ふかくなる。勿體もつたいなくも御骸ごがねに、苦患くけんをかくる後生のまよひ。いか様さまかたりか物取か。エ、腹立はらだやにつゝ、いやつ。暫しばし御免ごめん」と郎等らうらうが、ついたりより棒ぼうをつ取とりて、つどけ打うに時宗を、「ちやうく」と打うたりける。「是は」と云いて鬼王兄弟立おのれよる所を、「ヤア己等おのれとも唯ただをこふか」と、はらひ打うにたゞき付つけく、「つたへ聞く判官殿御存生おんじやうの折あから、東下あづまりの忍しのび路ぢや、安宅あたくの關せきにて、我が子の辨慶べんけい、判官殿をうつたるとや。それは富樫とみがしをたばかりの、智略ちりやくの棒ぼうのゆがみなき、此辨眞べんしんが心底しんていを、海野殿への云い分に、たゞき殺ころして見せ申まさん」と、口にはいへど心根こころねは、主君しゅくんなり我子わがこなり、思おもひの色いろをはら立たひの、涙なみだに見みせ

てうつ杖も、外れよかし反れよかしと、打ばこなたはさとられじと、用捨もなく身にうくる、互の心ぞあはれなる。海野我をおり、「ヤレさなせそ辨眞。殺してはいかどなり。もうよいは」と引きとむる。ス「いやたよき殺さん」と、猶振上ぐるを棒もぎはなせば、ス「エ、残念や口惜や。草のかげにて判官殿、さぞや悲しくおほされん」と、義經にかこつけて、胸にたもちし涙をぞ、わつと泣出す其ころ。鬼王兄弟時宗も、思ひやりたる忍びねの、歎きをかくしてうつぶけり。海野重ねて「是々若者、以前汝はあの者が主人といひしが、いづくの町人、商賣は何ぞ」時宗聞もあへず、「さん候某は、奥州伊達の郡の傾城屋にて候が、あれなる女を金銀出し、傾城にめしかよへ、只今つれて下り候」海野なをもうたがひ、「エ、然らば定めて請狀あらん。それにて讀め。聞ん」といふ。

けいせい請狀

夏書―夏九十日
間に信ずる經を
書寫する事
突出―月に
か
く、新造と同じ
く傾城となりて

もとより請狀あらばこそ。懷中より時宗が、夏書しかけし普門品をとり出し、請狀と名付、たからかにこそ、讀上けれ。「傾城奉公請狀の事、一此なみと申す娘、ながれの道に身をしづむ、建久四年癸の丑、五月十五夜突出し女郎。何所のくももさはりなき、

始めて出世した
るもの「色道大
鑑」

させもが露しもぐさの露と
きすに掛く
入性根入智羅
端一圍より一段
低き女郎

くずのは一層に
かけ裏見萬の葉
をとりたり

隠ぞ積り陽成
院の筑波根の歌
による
誘ふ水小野小
町の誘ふ水あち
ばいなんと思
ふの歌による
横波横鏡
指田の磯差出
口に掛く
もがり一圍り
歌一刺ぎにかく

影も丸年十年きつて、金子百兩たしかに手取の身は籠の鳥。親は他國の死に目なりとも、年の間は花街のほかへ、一あしにても踏もかよはぬ、遠國波濤へ賣てやりてや姉女郎の、をきてそむかず勤させもが露ほども、奉公に如才なく、客をばふらず心にかけて、まはる紋日を一日も、おこたらせ申すまじ。第一には間夫狂い、浮名ほくろに入れ性根する男あつて、勤麓末にいたすにをいては、着の儘ながらの端におろされ、又はみづしの下女にせられて、竈の火を焚き湯殿の水くみ、門はきせどはき、庭の掃除のちりや芥や紙くずのはの、恨みとぞんじ候ふまじ。萬一此者年のうち、花街をにけて走り井の、水に身を投刃にふし、心中して死したり共、御難はかけじ何方迄も、請人出てさばきがみ、油もとゆひ紅はな紙、あしだせきだにいたる迄、仕着の外は身の入立てとの定めなり。もし又ふかき縁のあり、戀ぞ積りてみなのか、さそふ水とて請出す、あたひ千金萬金なり共、それは主人の得分たるべし。もし誰人ぞ流れの身に、よこ波かけてさまたけの、さしでの磯のものがり舟、推ていとまを取ならば、衣裳残らずはぎすよきの、奉公かまひ給ふべし。總じてつとめの其間、下戸なり共酒のみ習ひ、文には虚をかき習ひ、とこにて人をやきならひ、ねぶたく共るねぶらず、泣ともなく共後朝の、わかれに泣せ申すべし。

はつかりうろ
かり

起請誓紙こしやうせいしに身の内の、血ちをばおしませ申すまじ。ゆびは切損きりせん、かみも切損きりせん、申しぶん候まじ。其外浪華なにはのよしあしに付つき、後日ごにちのための傾城奉公けいせいほうこう、請狀けいじょうの趣おもむきくだんの如し」と、天もひびけとよみ上たり。海野うみのの太郎たろう疑うたがひはらし、「扱あつかは子細こさいもなき者なり。疾々せきせき通れ」と許ゆるしけり。時宗ときむねすましたりと思おもひ、「御聞分有ごききわけありがたし。扱あつかさいぜんより承うけたまはれば、判官殿はんくわんでんのゆかり御尋ごたづね候とや。我われらが本國奥州ほんこくおうしゅうには、其末々すまたくの多く候へ共、今日迄手てをおき誰かまふ者もなし。あの辨眞べんけんめが我々われらを、打擲うちちやく致いたせし憎にくさも憎にくし。拙者せつしやに預あづかり下されかし。からめて國へ罷下り、辨慶べんけいが親おやをとらへしと、國中かうちゆうに風聞ふうぶんせば、義經よねきよのゆかり共、堪忍かんにんせずあつまらん、所ところを皆々みなみなかりもよほし、搦取ならめとつて參まゐらせん。一ツは旦那だんなの御奉公ごほうこうと、誠まことしやかにさよやけば、海野うみのほつかりとたらされ、盃さかづきイヤ是こゝはできた。きやつは某我君たががきみより、預あづかり申せしやつなればくるしからず。人ひとをそへて汝なんぢに預あづかりけん。かれをお鳥とりにからめ取とつて、我われに手てがらをさせてくれよ。それく角田兵五兵六すみだひやう、兄弟あにがたかれに付つてゆけ。随分ずいぶんぬかるな。沙汰さたばしすな。判官はんくわんの末類はつるいを、おほくもいらぬ一兩人いちににりん、生取いけとつてくるよなれば、コレヤ此海野このうみのは手てもおろさず、かましてのんだる大手おほてがら、急度禮きつどは重ねてく、急いそげくと別わかれしは、愚おろかにも又あさましし。角田兄弟すみだあにがた「是こゝはふしぎの同道どうだう。いざ參らん」とぞ申し

うまくと云々
うまく欺きお
ほせたり

なまぶし—なま
くら武士
いきばね云々—
口をたゝかすな

ける。時宗あたりを見まはし、「海野ははるかに行過ぎたり」鬼王に胸せし、二人を左右へばたくとけたをせば、「コハ狼藉者」と起あがるを、鬼王團三郎つよとよつてしつかと取る。時宗からくと笑ひ、「我を誠の町人と思ふか。河津が次男曾我の五郎時宗といふ者。此入道は鬼王團三郎が父、津藏の入道といふ者。我々をかばひ、辨けい親辨眞と偽りしを、鎌倉中の大名小名のひけ口へ、うまくときこしめしたるおかしさよ。何とぞ奪ひ返さん爲、和田殿へ参る折から、海野殿の運のつき、よい所で出くはせ、時宗にたらされてお預りの大事の囚人、ふかくと渡さるよは、猫にかつを、武士に似合ぬあまい事。是ことななまぶしたち、うぬらが首よりつまさき迄、みぢんにけづつて兄祐成が、手がひのとらに悦ばせん。それくと引起し、口に込薬、「いきほねたよすな。山ぎはにて討て捨よ。入道妹は古郷へをくれ。某は祐成の、狩場の出立きづかはし。追付て本望とけん。門出よければ行さきの、仕合せは手に取たり。吉左右しらせん」典待奉る」と、につこと笑ふ貌とかほ、主従此世の見をさめとは、後にぞ思ひ三重しられたる。其日の御かりも列卒をあけ、息をやすむる午の刻。「お辨當」とふれければ、狩場も暫ししづまりける。ことに富士の根がたより、七年物の牡鹿八またの角ふり立て、險阻昔路をのさくと、北をさ

ひたぢー直路

またもの一陪臣

しておとしける。秩父の家臣本田の二郎近経、「天のあたへ」と弓と矢つがひ、駒をひたぢに歩ませよせ、すでに矢ごろと見へし所へ、工藤左衛門祐経一さんにあをりかけ、本「コレ本田あのしかは祐経が見付射とむるぞ。粗忽すな」とこゑをかくる。本「御説にて候へ共狩場のならひ、目がけし鹿を人に渡す法はなし。はづれんまでも近経が、射とめて御らんに入れ申さん」と、なを引しほれば祐経いかつて、「ヤアをのれは緩怠者。秩父が下郎またものの分として、此祐経に慮外をなし、主の爲もあしからん」と、廣言はいて乗出す。近経無念に思へ共、慮外といへば力なく、「エ、をのれ祐経め、矢印になのりなくば、遠矢に射落しくれん物」と、こぶしをにぎつてひかへし所に、曾我の十郎祐成、祐経をはるかに見、竹笠引込み弓をふせ、しげみをわけて忍びよる。本田きつと見、「是々申し祐成殿、忍んで御狩の御供のよし、主人重忠聞及ばれ、御用あらば承れと申し付られ候。貴公數年御ねらひの鹿こそ見へて候。去ながらかれは馬上、貴公は步行。幸ひ近経も當座の遺恨候へば、此馬をかし奉る。召れて鹿のまつたど中、うらみの矢壺ははづれ申さじ。人目あればおいとま」と、おり立馬をあたふれば、祐成手綱をおしいたゞき、「兎角は詞多からず」と、ふもとをさして近経は、我かりやへぞ歸りける。祐経鹿を見うしなひ、谷を

兎角は云々一何
しる人目もあれ
ば詞多なりと也

へだてし岡のべの、小松の中を乗まはる。祐成「あはや」と谷ごしに、馬引よせ打のれば、不思議や此馬身の毛をたて、四足をちぢめて立すくむ。「南無三寶」と、うて共く、あをれ共、ちつ共動かすはねあがり、前足折て祐成を、眞顛倒にはねおとせば、祐成は枯ぐるに、弓杖ついで下たつたり。おとして馬はかるくと、谷をくだりにかけてゆく。「折しも時宗はるかに見付け、はしりかよつて馬の口、しつかととめて引來り、「扱よき所へ参りたり。鞍心しらぬ馬主をきらふと覺へたり。鎧を踏しめしつかとめせ」藍「心得たり」と翻然とのれば、又此馬高いなよきし、躍りあがつて祐成は、屏風がへしにどうと落、岩角にむねうちあて、氣をうしなひたる計りなり。時宗兄をいだきあげ、時「エ、にくや、此馬は、目前のかたき刺殺さん」ととびかよる。祐成はつと心づき、「やれまて時宗、まつたく馬のあやまりならず。花野が新田にあたへつる、虎のいきづめ懐中せしが、怕れたるに紛れなし」と、守りよりとり出し、はるかの谷へ投すて、駒引きよせうち乗て、引立見れば不思議やな、元の如くにあゆみゆく。「つゞけや時宗來れや五郎」と、谷を乗こへ乗おろし、岡の茅原ふもとの松原、追つ返しつ尋ぬれども、はや祐經は見へざりけり。兄弟目と目をきつと見合せ、こぶしをにぎり牙をかみ、「寶の山にいりながら、むなしく歸る口惜さよ。

よし／＼今日けふはたすくるとも、明日あすまでいけては置おくまじきぞ。此富士山このふじは死出しでの山、富士川じかはは三途づづの川、兄弟せふみせぶみのかど出の、酒宴さかもりせん」と笑わらひたはふれ立かへる。そろひにそろひしものゝふの、手本てほんなりかどみたり、をしへなるはと後の世のちよまで、つきぬは曾我そがのはなしなり。

第三

かぢるふー陽炎
にて日が暮るれ
ばなくなる故曾
我夜討の最後
に
かけたり
虎が涙一五月廿
八日の雨を云ふ
蝶千鳥一兄弟の
若物の模様

身はかけろふのうき命いのち、うき命、暮るゝや、かぎりなるらん。頃ころしも五月二十八日、空そらさみだると黄昏たそがれの、虎とらが涙や少將の、よるの雨さへしきりなるに、兄弟最期さいごのはれ小袖、母の手づからぬひ仕立したて、請うけし五體たいの胎内たいたいへ、歸る心に本来ほんらいの、經帷子きやうかたむらと觀念くわんねんし、あけ羽はのてふや村ちどりも、翼つばさしほると風情ふぜいにて、松明たいまつかゝけ、笠かさふりあけ、兄弟かほを見合せて、涙ぐみたる哀あはれさよ。話わいかに時宗、和殿三歳祐成五歳、竹馬ちくばのむちを打うちしより、片時はなれぬ兄弟おせきひの、六度契むすりて兄となり、七度むすびて弟となるとつたへしが、今宵こよひ裾野すそのの五月雨さつきあめ、くさの雫しづくときえはてて、未來みらいの逢瀬あふせはさだめなし。今ぞ此世の見をさめぞ。御身かほが貌かほをよつく見ん」時「母上見奉ると思ひ、祐成殿の御かほをも、今一度見せ給へ。

事とはぬ草も木も、雲水空のなごり迄、今をかぎりのわかれとや」詰「いつも風はふきけれ共、こよひの風ぞ身にはしむ。虎少將が書置を、あけなば歎かんふびんさよ」時「鬼王や團三郎、さいごの供にはづれたる、くやみの歎きはれ一ツ」詰「一の宮の姉禪師坊、彼是つきぬ思ひの涙、敵を討て本意をとけん」うれし涙も様々の、雨にあらそひ袖と袖、しほりかねたる計りなり。時宗涙の隙よりも、「彼れ御らんぜ十郎殿。御所の假屋のかたより、供人ぐしたる乗物の、庵に木瓜付たる挑燈こそ、祐經と見しはいかに」詰「チ、うたがふ所なし。こよにて待受本望とけん」時「もつとも」と、松ふみしめし、天にもあがる嬉しさに、足のたてども覺へばこそ。漫ふるひて待かけたり。程なく近付左右方より、二ツの挑燈ばたくと切り落す。「あは狼藉」と夕やみの、さす共つく共しらぬ夜に、中間若黨縦横に、打物ぬいて薙まはれど、二人は小わきに身をひそむ。危うかりける有様なり。輿の内には女のこゑにて、「必定夜盜と覺へたり。大道へ出つらん。此處を捨てそとがきより、山ぎはを搜索されよ」と、あらぬ方へ教ゆれば、おろかの下人「尤」と、しどろになつて追かくる。やゝあつて女輿より出、小ごゑになつて、「十郎様五郎様、是なふ申し、最前ちらと御兄弟と見付たり。大じない時宗様、祐成様」とよぶこゑは、きいた様な物ごしなれ共、粗

だんない一大事
なし

あは〜はあ
はあと極
杉一仲居の名
機錢一采の目に
て後世地に蓋し
て錢を投入れ勝
負するもの(經
辨笑覽)

忽に「あつ」共いはれぬ仕儀。兎角の思案もなきうちに、女はせて「ア、辛氣。なふお二人様、だんないはいなあ。きせ川の龜菊じやはいなあ」兄弟ほつと力をえ、「チ、いかにも五郎十郎なり。シテ龜ぎく殿のかうした事は合點ゆかず」といふ、聲をしるべに近より、「先お久しや、なつかしや。扱わし事は、虎様や少將様の御くらうになされし故、舞の一手もまひならひ、上手でもないものを、私が仕合せにてまた跡の月、祐經に請出され、即ち主の親分にて、只今は頼朝様へ御奉公に出され、御酒宴のお肴の、舞やうたひや琴琵琶にて、御前をつとめ候が、最前おかほはちよつと見る。供の者が見付しが、刀のさきでも當ましてはと、よきちゑを出して下部共を去せしが、さだめし日頃の御望ならん。さりとはあぶない。首尾はあは〜と思ひし故、是痞へが上つた。御無事なかほ見ておられしや。とら様はまめなるや。少將様は赤子うまんしたか。杉の疝氣はおこらぬか。猫の子はどうしたへ、かぶろ共は今に攤錢しますか」と、急な所に取ませし、女郎はあどなきならはしなり。兄弟氣はせく耳へもいらす、「一だんのお仕合せ。シテ先づこよひはいづくへ」とあれば、鳥さればとよ鎌倉殿、さみだれの夜のつれづれに、祐經の假屋へ御成なされんと有お使に參る」と、いひもはてぬに時宗「イヤ是、日頃しつての事なれば何をか

うつり—録
ならびて—手引
して

中—發中

くさふ。こよひ祐經を打つかくご。それに頼朝入給ひては、本望とけぬのみならず、仕損ぜんは目前なり。何とぞ思案し、頼朝公こよひの御成をとどめてたべ。生々世々の厚恩、曾我兄弟が一生に、人をおがむは是が初め」と、手を合せてぞ頼まると。龜菊しばしいらへもせず、「是はよぎなき御頼み。虎様や少將様の、うつりといひお二人を、如才に思ふ心でも、祐經かばふ心でも、誓文くされなければ共、親分を討つ人に、ならびてなどとの後口のさた、傾城のはては道しらず、尤かなといはれん事、妾計りか勤めたる身の總恥なり。どうもお返事なりがたし。わるうは聞てくだんすな」と、あぐみし色ぞ道理なる。時宗聞て「ヲ、至極したく、日本一の思案有。兄弟祐經うつての後、御所へきつていらん時、百万人がかよつても、事共せぬ我々なれ共、御身むかつて此時宗をくみとめ給へ。女と見たらば某がやすくと擲められん。時には御身も親分を討たる者を、女の身にてくみとめしと名をとれば、身一ぶんの道は立、我々も本意を遂ぐ。ひらに頼む」と手をすれば、龜菊も恐ろしながら、「おいとしや其義なら、祐經病氣と中にて御所へお返事申し、今宵のお成をとめ申さん。御本意とけられ其後は、みづからにくみとられ、我が一ぶんを立てたべ」と、いへ共さすが女心の、身もふるはれて聲こもり、眞「あれ供人

小枕―かもじの
根に用ゐる本

の立かへる一言たがへな」「たがへじ」と、左右へわかるゝ雨のあし、行かたくらく風さはく。虎少將は寢がての、枕に残る書置を、見るよりおどろき年比の、契りはこよぞ冥途まで、遅れじ物とかねてより、思ひそめおく蝶千鳥の、装束引かけ太刀かたな、髻小枕取てすて、地髪計りをはちまきし、假屋まぢかく忍び入、出立小がらにりよしくて、女とさらに見へざりけり。勝手はしらず雨夜なり、二人手をくみ隈々を、庶祐成やおはする」少「時宗やまします」と、小ごゑに呼でうそくと、尋ねまはるは過し夜の、手くだに似ても事かはり、胸慄はると計りなり。かくとはしらず兄弟は、袖打かざし松明に、足もと計りてらさせて、はるかに見ゆるを虎少將、「アレ夜廻りか番衆か。見付られてはあしかりなん。一先づのけ」と一村の、森を目あてにはしりすぎ、逢でわかれし本意なさよ。兄弟は祐經が假屋の外がき切やぶり、中門につよといれば、郎等若黨悉く、晝の狩には仕疲るる、雨を頼みのゆだん酒、みな高いびきして伏したりけり。所々のともし火をふきけしく、そろりくと差足して、なんなく敵祐經が、ひとまの寢所に忍びつき、溜息ほつとついたりし、心のうちこそうれしけれ。「サア是迄はしすましたり。今暫らくぞ、南無八幡はこね兩所伊豆三島力をくはへ給へや」と、近付よつて見てあれば、祐經沈醉高枕、ぜんごもし

一服云々一遂ひ
難き折を得る、
佛羅特值如盛
曇波羅華又如
一眼之龜值淨
木之孔一法華經

弦なき弓云々
憐てたるさま

らぬ其行さま。「一眼の龜の浮木にあひ、優曇はらけの三千年の、春にあひたる心地ぞや。うどんけのさく時はおがみて枝を折とかや。まれにあふたる親の敵、おがみ打にうてや」とて、につこと笑ふて立たりし、うれしさ類ひはなかりけり。兄弟刀をぬきはなし、祐經がむないたに、あてては引ひいてはあて、大音上て、「河津の三郎が嫡子十郎祐成、次男五郎時宗なり。おきあへや祐經、左衛門やツ」といふ聲に心得たりと枕の太刀、とらんとするを祐經左手の肩より右手のわき、袈をかけて切付る。「五郎是に」といふまよに、腰のつがひを板敷迄、きれもきれたり年月の、あだとうらみと一時に、今打ちとくる氷の太刀、折もせよくだけもせよと、寸々にこそ切付け。そばにふしたる大藤内、太刀風に目をさまし、「狼藉有出あへ」と、裸身ながらかけ出て、あなたこなたとわめきまはるを、兄弟左右よりもろすねなき、四つ五つに切ちらし、門外さして切出れば、侍すは夜討こそ入たれ」と、つるなき弓に矢をつがひ、つなぎ馬にむちを打ち、太刀のつかをこしにさし、上を下へと三重かへしける。たいらくの平馬のせう、「祐經が討れしうへは、らうぜきものは曾我殿原。いでくきやつらを討とめて、狩場のしよの恥辱をすまけ」と、愛敬安西海野うすきが、いわかへく打ち出る。兄弟は事ともせず、小柴がきを小だてに取り、もみにもふでぞ

運づくー運だめし

あいろーあやめ

頼伽云々ー如
歌羅頼伽鳥在
殿中未發聲已
能勝諸鳥一大
子路ー孔子の弟

戦かひける。多勢とは云ひながら、會我殿原が死狂ひに、手負討死四百人、足のふみどもなかつし所に、新田の四郎忠常「祐成にけいやく有り。是をとらん」とかけ出しが、「イヤ新田の四郎と名告なば首さしのべんは必定。然れば武士の本意ならず、運づくの勝負せん」と、祐成にわたしあひ、切むすび切ほどき、たよかふひまにも祐成は、「本望はたつしたり。おしからぬ命なれ共、新田の四郎忠常に、預かつたる我首を、人手にはわたさじ物を」と、つぶやきながら打合たり。新田是を聞くよりも「やさしき者の心ざし」と、なをばぢり入て名乗もせず。物のあいろも見へざれば松明出だせとよばはるこゑ、祐成「はつ」と飛しさり。「さいふわ殿は新田殿か」思「チ、忠常」とこたふ。南無三寶こはいかに。それ共しらす最前より、太刀を合せしくやしさを。厚恩といひ契約の誓文たがへし面目なさ。サア契約のくび取玉へ」と、太刀を投すて座をくみて、首さしのべてぞ待るたる。新田涙をはらくと流し、「扱もくやさしき今の振舞、頼もしや神妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ、頼伽は卵の内にて其聲諸鳥にすぐるとは、殿原達の御事よ。幼少よりひかけの身、武士の參會も絶、百姓土民に打まじはり、弓馬の道もとり失ひ給ふべきかと侮りしに、異國の子路が勇にもまさる。只今御扶持を下さると、鎌倉武士はおほけれ共、誰か殿原にまさるべき人は

なし。河津殿の御子なりけるぞ。勇力孝行仁義の道、か程たつせし祐成を、いかに契約なればとて、新田などがむざくと御首を給はるは、天の咎め弓矢の罰。ゆかりの人の歎きの程、思ひやられて今更に、いづくに太刀をあつべきぞ。忠常討ればうたるよ迄よ。うんに任せ勝負あれ。なふ祐成殿十郎殿」と、なをせきかぬる感涙は、理りせめてあはれなり。十郎も涙にくれ、「嬉しき人の詞や候。年月ねらひし敵を討ち、御へんの様な弓取の、手にかよつて死なん事、祐成はなんほう果報のもの、成佛迄も疑ひなし。はや首を取給へ」と、涙をとどめいひけれ共、忠常は目もくれて、討つべき氣色はなかりけり。祐成いかつて「エ、曲もなし忠常、雑兵の手にかよつて名をくだせとの事成か。せひに及ばず自害せん」と立ちあがれば、忠常「ヲ、誤つたり御免あれ。南無阿彌陀佛」と諸共に、水もたまらず打おとし、きつさきに首つらぬき、「鬼神よばれたる會我の十郎祐成を、むさしの國の住人、新田の四郎忠常討取たり」とぞ名乗ける。無慙やな、時宗はにぐる敵をおつかけしが、「今は何をか期すべき」と、御所の假屋へはしりこむ。簀戸のかげより女の姿、うすぎぬかべて、「時宗を捕た」といふてしつかとたく。時宗ふり返りきつと見て、扱は龜菊ごさんなれ。今少し死ぐるひに、よき侍二三百も切りとめたくは思へ共、契約なれば、「ヤア搦めよ。あ

ぐんでうづよー
組んで見るがよ
い、此句詠曲實
感にもあり
天魔波旬一波旬
は梵語にて惡と
譯す、恐ろしき
惡魔を云ふ

あまさじ一述が
さじ

底めなく云々一
包まず心の中を
あかしあふ
女子のざい一女
の分

つばれをのれは日本一の剛がうの者をぐんでうづよ」と手をまはずを、高手小手にからみ付、大音あけて、「天魔波旬てんまはじゆんと呼ばれたる會我そがの五郎時宗を、御所の五郎丸がいけ取たり。をりあへやツ」とうすぎぬ取れば童わっぱなり。時「南無三寶はやまつて擲からめ捕とられし口惜くちせしや」と、はざりをなし地團ぢだん太ふみ、かどみの様な兩眼りやうがんに、涙を流すぞ哀れなる。是非ぜいひなく大勢おほせいをりかさなり、千筋ちすぢの繩なはを四方へ取、引立行ひきたてゆくこそ無念なれ。かくとはしらで、きせ川の龜菊かめぎくは、會我の五郎に契約有けいやくあり、くみとめんと顔かほかくし、繩なはをかいこみ此處こゝ彼處かしこ目をくばつて尋ねける。とら少將も「兄弟はまだ討れ給ふまじ。此さはぎの其の内に、ちらと也共顔なりともかほを見て、冥途めいごの契りを結むすばん」と、同じ所を行きかへり、立まふ揚羽あけはのひたよれば、宵よひに見たりし時宗なり。あまさじと飛びかより、「きせ川の龜菊ぞや。時宗やらぬ」としつかとくむ。くまれて少將すうしやう振放ふりはなさんくともだゆれども、龜菊かめぎくははなさじと捻ねぢあふ所を、虎御とらごぜん兩方へをしわくる。顔かほを見れば少將なり。龜菊「あつ」とおどろきて、暫しばし呆あつれて詞もなし。やゝあつて虎少將とらせうしやう「つれないぞや龜菊殿。昨日今日迄きのうけふかう三人は、兄弟よりも底そこるなく、あかしあひたる中ぞかし。時宗やらぬのがさぬと、女子をんなのざいにあんまりな。そうしたものではないぞや」と、云捨て行くを引きとどめて、「御恩ごおんをうけし皆様の、殿御どのごとある御兄弟に、そもや如才じよさいをい

たさふものか。宵にはや御兄弟の危き所をたすけ參らせ、こよいの御本意とけがたかりし
 を、わらは心のはたらきゆへ、扱みづからにくみとめよとの御契約候」と、よひの次第を
 あらましに、語るも聞もいそがはしく、「サア此うへはこよの勝手を案内して、御兄弟に今
 生で今一度あはせてたべ。はや今のまもお命しれず。はや尋ねん」といふ所に、夜廻りの本
 田の二郎馬上ながら大音上、「曾我の十郎祐成は新田の四郎が討ちとめ、弟の五郎時宗は
 五郎丸がくみとめて、はや事はをさまりぬ。御所の假屋は安全たり。鎮まり候へしづまれ」
 と、館々をふれまはる。人々「はつ」と耳にたち、「あれ聞給へ」と魂も、きゆる計りに身にこ
 たへ、「若しやくくのたのしみの、心の綱もきればてたるか情なや。同じ道に」と走り出、か
 け出く、歎かるゝは、目もあてられぬ計りなり。龜菊やうく慰めて、すかしいさむる詞
 のつゆ、「共にきえては誰人か、ながき來世をとぶらはん。此世計りはみじかよの、その明
 ぐれにほしきへて、澤の螢やなくかはづ、昨日のこゑにかはらねど、今のあはれを忍び音
 に、とぶらひかはす八聲のとりぐ、野寺の鐘のひとき迄、又まつ宵にいつ聞ん。これ
 や限りのきぬぐくならん」と、泣くくつれてぞ歸りける。

同じ道―同じ死
出の道

とぶらひかはす
一蛙と蛙と二つ
にかりて云へり

第四

金置輪鞍の山
形のふちを金に
て鉄めたるもの

しやらくさし
出過ぎたる話に
て腹筋がよると
也

明王めいおうは一人の爲ために其法そのほふをまけずとかや。されば頼朝、曾我兄弟そがが有様はなは甚だかんじ思召し、時宗ときむねが死罪しざいを宥なだめまほしくおほせしかど、國法こくほふもだしがたくして、明あきる廿九日に誅ちゆうせらる。扱あつか又新田の四郎には、高名三度の御契約ごけいやくさう相違なく、松島月毛に金ぶくりんの鞍くらあぶみ、五色のあつぶさ馬よろひ、新開しんがいのあら四郎御使を承り、新田が假屋かりやへひかせける。朝比奈の三郎義秀あしひでは、曾我兄弟そがの墓はかまふでして歸るさに、此體ていを見て無益むやくしくや思ひけん、つかくとより朝あヤアしんが殿、見申せば君御きみひさうの名馬をひかせて、どれへがな」といへば、しんが聞いて、「わ殿は御存知おんぞないと見へた。新田の四郎忠常拜領なり」とこたふ。朝比奈とほけた顔かほにて、「ムウめづらしや。此馬は池月磨墨いけづゝするすみにもまさつたりとて、秩父北條我らが親父おやぢをはじめ、此義秀このよしひでさきとして、皆々願ねがひ申せしかど、下されぬ御おんひさうを、新田には何なんとして。チ、ウがてんく。價ねがよさに賣うせらるゝの」といふ。しんがい重ねて、「ハテ悪口わるぐちを申さるよ。新田は富士ふじの人穴ひとあなへいり、希代きたいの猪しをのりとめ、曾我そがの十郎をうちとめ、高名三度に及びし故、御契約ごけいやくにて拜領はいりやうなり」と、いはせもはてず朝比奈からくと笑ひ、「イヤしやらくさし腹筋千萬はらすぢせんばん。三度の高名を珍めづらしさうに何事ぞ。但高名して御馬

はぢかけある一つ
めかくら
ほうど云々と
んともて餘す

かくをいれ一盤
のふちの四角な
を所にて馬の脚
を訂つ（貞丈雜
記）

をもらふならば、保元平治より源平の合戦迄、高名有る者數をしらず、此朝比奈もお耳にたつたる覺えあらん。高名づくにてもらはるゝ御馬ならば、新田迄やらせうか。此朝比奈が拜領申した。ふしやうながらしんが殿、お取次よい様に頼み申す」とにぢかけける。しんがいはうどもてあつかひ、新所望ならば御前にて直に訴訟候へ。某はお使なれば罷通る」と行かんすとす。朝どつこい、扱はしかとなるまいか。朝比奈はわるいくせ。あるひは敵の首でも城でも、ほしいと念をかけてからは、取らずに置たるためしなし。是非におよばず此所で山賊してぬすみ申す。後日に盗人とあつて、切腹仰付られんは必定。馬と朝比奈とは頼朝こそ換ぞんなれ。サア盗んだ。渡せ」といへば、新ヤアこいつ男を見ちがへたか。しんがいなるぞ盗んで見よ」と氣色する。朝比奈くつくとふき出し、「イヤ見違ひはせぬ。なるほどく、曾我兄弟に出合小柴垣をおしやぶり、たかばひして逃たるしんがが見しつたく、サア馬をぬすむ留て見よ」と、取て突のけ馬とり中間けたをし、手綱かいくりひらりとものる。主従「やらじ」とよる所を、馬引かへし八方へ、ふみちらしく鞭うちくれてかくをいれ、雲をかすみに飛せける。しんがいは力なく、童の手を切たる如くにて、恨しさうに打ち眺め、「待て已覺へてをれ」と、御所の假屋へ三重立ちかへる。

とら少將道行

戀といふ一戀の
字は音が二つの
縁に挟まりて下
に心あれば云ふ
越後一得にかく

月を招きし扇一
源氏橋姫の巻大
姫の故事
白地一知らじに
かく
墨繪一住みにか
く
扇一逢ふにかく
それます一繪す
と十寸鏡とかく
武藏野一大盃の
名(西鶴雜記)

戀といふ、文字の字形を判じもの。言葉しがらむから糸の、解くにとかれぬしたごころ。
いとをしや虎少將、母の歎きをいさめかね、慰さめかねつせんかたも、涙のうちに思ひ
つき、すこしちからを越後なる、禪師の君に告げやと、旅だつ姿此儘は、人や見しると
さしかざす、扇あき人團扇うり、昔しのぶの戀風を、よそに吹せてやつしゆく、世のな
らはしこそ果敢なけれ。人は兎もいへ我身には、三國一の殿もちて、富士さへつぎに
見し山の、今は上なき雲のみね、月を招きしあふぎにも、見しはかへらで面影の、なを
なつかしき御影堂。きどのがあふぎ召すまいか。夏をわすれて涼しさは、秋と白地や淺黄
地や、さつとくまどる一筆がらす、なにをうらみに仇し世を、墨繪彩色いろくくに、情
の種をまき砂子、すかし扇にたうあふぎ、あふぎく、あふぎ召せく。あふぎとは空
言よ。あはでぞ戀は、どれくそれます、それます鏡團扇や奈良團扇。扱繪團扇のしな
じなは、武者繪のたけき武士も、心やはらぐおやま繪や。浮世おとこゑたて髪に、なが
い刀をさすぞさかづき奴のく、奴がうけし武藏野の、くさ花づくし青によし、丹や綠青

語し得くと薄
とにかく

正の蝶一夏の命短き事、
姑不似三季秋、
(莊子)

ことく一塵

聞ふ一亡夫の
顔りしと約ぬ

なげそ一ぬ我
そなり

争皆一紅に似

あらしーあらじ
にかく

ぬりうちわ。羨やましきは高砂の、夫婦いもせのとも白髪。我になけとや箔うちわ。風をあきなふ其身さへ、空の暑さはしのがれぬ。しのの石原日にやけて、蝶も翼をやすめかね、千鳥鶴鶴足ひやす、清水がもとのやなぎかけ、風を見つけて走りつき、立やすらへばさらくく、さつと時雨の雨かとして、こゑにかさきる夏のせみ、春秋しらぬ可憎世を、よそに聞しも身のうへと、是も涙をそへぬべし。ならばぬ旅の憂宿り、夢さへ薄く間遠なる、蚊帳のつり手のみじか夜を、來ては水鶏のことくくくと、格子たよくに聞きまがひ、思ひまがひつ見まがへて、雲まにさはく稻妻と、行ゑもしらぬ思ひぞや。身はならはしの假寝にも、あひなれし夜のくせわるく、ひとり寝られぬ露の床。こちよれ枕ひきよせて、寄てもしめても又うらみても、抱ちからなき草枕。なけそ枕にとがもなや。「いざ」とて二人よりそへど、女子同士の徒臥や。我は辛苦のヨウヤヨヤヨ結ほれいと、解ぬこゝろが辛ござる。トヨエいよつろござる。とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある。團雪の扇雪なれど、消てもものこる世のなかに、ア、いかなれば我々は、戀のせごしをいくせとも、越て甲斐なきなせ川、四十八ヶ瀬うちすぎで、こしのしらやま白雪の、つもるは富士に似たれども、裾野の原に我おもふ、たまの在所はあらしふ

押へ―たんがり

ひだりまへ―慮
ふ儘にならぬを
云ふ

く、松江の里くれゆけば、暫らくやすらひ、三重たち給ふ。日も暮行ば人々は、宿をからんとやすらひ給ふに、「曾我一類の囚人此所のとまりにて、外の旅人は一人もこよひの宿は叶はぬ」といふ。二女「南無三寶」と膽を消し、「曾我一るいの囚人とは誰成らん」と問ひければ、里人「五郎十郎が弟、越後の國くがみの寺禪師坊といふ法師を、海野太郎行氏殿が承り、召取て御通り、用心かたく仰出され、旅人の泊はかなはぬ」と、云ふうちにはや牢輿の前後厳くとりかこみ、御家人さきを打ちはらひ、海野の太郎は押へを乗つて、弓に矢つがひ長刀のさやはづし、朝敵むほんの生捕なんどの如くにて、驛路のなかへかき入しは、見る目もあはれに淺ましし。鹿「聞給ひしか少將様」少「こはいかにせん虎様なふ」鹿「せめて御兄弟のうつりにもなれかし、又は母御の御なぐさみ、便りをだにもと心ざし、はるく下る甲斐もなく、はや召捕られ給ひては、なき人の御形見も、誰人にかは渡すべき」少「お二人の御最期にも、一足ちがふて逢もせず、わすれ形見に禪師様を、見んと思ひてはるくときたる甲斐なき旅衣。ひだりまへなる世の中や」と、なげくも心たよりなし。鹿「此上は越後に行きて益もなし。曾我に歸りて母御様に一先知らせ申さん」と、今きし道を立ちかへる、心の内こそわびしけれ。去程に右大將頼朝公、「曾我一類の落著は、ふじ野にて御沙汰有べし」と、いまだ假屋

三衣一僧衣の
襦袢、大、七、條、五
條

に逗留ある。かよりし所へ海野の太郎、禪師坊を召とつて御前に引据る。君御覽じて、「和法師は河津が末子よな。兄共が敵討ちしを知りつるか。但し知らせざりつるか」と御説ある。禪師居丈高になり、「恐れながら大將軍の仰せ共覺へぬ物かな。一ツ腹一生の兄が親の敵をうつと申すに、しらぬ貌する人間や候べき。但法師なればしつても討まじき奴と御覽ぜられて候か。我君天下をしろしめすも文覺と申す法師の力。此ばうず文覺はどこそ候はず共、一寸の蟲に五ぶの魂。かくとしらする程ならば、祐經を見共にをし向ぐそうは御座近く推參いたし、おほぢ伊東入道が御恨をも申すべかつしものを、残念や本意なや」と、はどかる氣色はなかりけり。頼朝なをも心ざし引見んと思召けん、暫ヲ、さもこそあらめ。汝はさせるとがもなし。伊東が所領をあたふべきが、けんぞくして頼朝に奉公してんや」との給へば、ぜんじ眼に角を立聲をあらよけ、「よつく某を腰拔と御覽せしな。兄共は誅せられ、三衣になはをかけられて、所領がほしい命がおしい、還俗いたさんと申さふか。但それもお心次第。去ながら愚僧を助けをかれふならば、あつぱれ御身の一大事。明くれ君を見る度に、うらめしや先祖のあだ、恨めしやくと思ひつもつて何處ぞでは、御首ほしくなり申さば、粗忽いたさんは必定。然れば虎の子を飼にに

たり。よつく御思案候へ」と、なを憚からず申しけり。御前伺候の諸大名、「誠に河津が子なりし」と、舌を巻ぬはなかりけり。君も感涙押へかねさせ給ひ、賴「あつばれ猛き勇士どもや。彼等兄弟召つかはば、頼朝が一方の用にも立たんず者なれ共力なし。時宗が最期の所へ引出し、うつていとまをとらすべし」侍畏つて候」と、引立んとする所へ、老母二の宮とら少將、警固も番もおぢばこそ、外垣二かはをし通り、御白洲の内がきにひしくとすがり付、母「やれ母こそきたれ禪師坊、浅ましの有様や。やれ可愛の者や」と泣きさけび、「なふ我君も聞召せ。老中達も聞給へ。そも出家は佛子とて、衣を墨に染むるなり。釋迦如來の御子となり、此世の父母兄弟とは、他人になつたるあの法師に、何の科の候ぞ。侍の子の敵うつたが不思議かや。時宗が切れしさへ世に御恨に思ひしに、遠國波濤のすみぐ返、さ程にさがし曾我一家を、絶さで叶はぬ事なるか。あの子計りは助けてたべ。なふ御慈悲なるは人々よ。申しなをして玉はれ」と、理非をもわかず聲を上げ、垣にすがり伏まろび、きへ入りたへいり泣き玉ふ。今まで勇む禪師坊、母の歎きを一目見て、朝日にきゆる初霜の、たどしほくと心くれ、前後もわかぬ其有様、君を初め參らせて、滿座の諸武士下々返、袖を絞らぬものはなし。

十神力一法華經
 科註に爲付囑
 深法現十種大
 神力とあり
 自受用一自力に
 て現身の儘成佛
 する事
 五時一華嚴阿
 含、方等、般若法
 華、涅槃の五時
 八教一化儀四教
 と化法四教
 薩達摩云々妙
 法蓮華の梵語
 超八醍醐一五味
 中最上味にて四
 味の權教より法
 華の實教を説く
 に喩ふ
 窟の峯一靈鷲山
 顛倒一心の亂れ
 婆娑分段一衆生
 界を云ふ
 刹利一印度の王

三ぶきやう

やゝあつて禪師坊、「ア、愚なり母うへさま、疾病におかされ劍にふし、火に入水におほ
 るるも前世の業。品こそかはれ生死の縁、のがるゝ道の有べくば、世尊入滅有べしや。十
 神力をあらはせば、一日も百千さい。まよいの衆生は以如半日。あかず惜しと思ひなば、
 千歳の夢の心ぞや。母も姉も聞給へ。禪師坊がさいごに、自受用即身成佛の、御法をと
 いて聞かすべし。御前伺候の人々も、なりをしづめて聞玉へ。それ、世尊一代五千七千
 の經卷は、そも華嚴寂滅とうじやうにはじまり、法華涅槃に書をはる。其中間の五時八
 ツきやう、中にも薩達磨芬陀利花、妙法蓮華と翻じたり。三世の諸佛出世の本懐、衆生成
 佛の直路、超八醍醐の鷲のみね、うへなき法ととかれたり。こよにしばらく、縁なき衆
 生を度せんがため、方便の門をかまへて妙法蓮華の、五字をかくして南無阿彌陀佛の六
 字に攝す。五戒十善の窓の前には、顛倒の霧立ちのほり、座禪の床には、煩惱の眠り深く、
 修行の天地にいたりたがたき愚痴の凡夫は、六字を請じて極樂に往生す。娑婆分段の凡
 身には、恩あり仇あり貧福あり。ぜんあく上下のしなくも、冥途の道に入ぬれば、刹

首陀一印度の農人
提婆、不輕一何れも法華經に詳なり

一心三觀一吾人の心を空と假と中との三機に觀念する意
圓頓一化儀四教中の圓經頓經止觀一圓頓の教解
隨錢一不變とうかく一貪愛にて思財思色
二乗作界一壁圓と殺覺とが佛に
無作三身一佛は空なれども或時

利も首陀も、かはらざりけり。己心の彌陀、唯身の淨土なれば、本來無東西何處、有南北と觀すべし。提婆達多是前生にて佛の師匠たりし身が、阿鼻に墮して苦をうくる。不輕菩薩は打擲せられ、憎まれながら妙覺の、佛のくらるに至り玉ふ。皆是一念信解のとく。それ六字の名號といつば、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字をせつし、方等經にて阿の字をひらき、大般若にて彌の字をつどめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂大師の御釋に、諸經諸讀ださいみだ縁深厚故とのべ玉ふも、深き心や右明の、一心三觀のむねの月は、圓頓止觀のそらにかよる。隨緣眞如のはつしほは、同一かんみの岸にみつ。中道實相の車は、無二無三のかどにとどろき、一乗菩提の駒は、平等大惠の園に嘶ふ。とうかく瞋恚の時鳥は、妙覺究竟の峰になき、二乗作佛の鶯は、無作三身の谷にさゑづり、諸行無常の春の花は、是生滅法の嵐に散り、生滅滅已の秋のしぐれは、寂滅爲樂の紅葉をそむ。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟りを得、韋提希夫人の無生恩にあやかり給へ、母うへ様。禪師が素懷はにあり。思ふ事もいふ事も是迄なり。人々サア我首を召されよ」と、目をふさいでぞ居たりける。頼朝重ねて、「學問といひ武勇の法師、近頃惜しき者なれ共力なし。此うへは罪なつくらせそ。早々

は法身、肉身又
報身となつて現
はれ給ふ
諸行無常云々
涅槃經の四句の
偈

ひざう子一大切
な子
あぐむもてあ
ます

討てすてよ」と有る。然る所へ、新田の四郎忠常、「言上のこと有」と、寶戸をひらかせ伺候す
る。人々は涙ながら「あれ祐成討たる敵。人こそ多きにあの者が討たるか。うらめしや面
にくや。腹立や口おしや。食殺してのけたや」と、齒がみをなして歎かるよ。忠常御前に向
ひ、「曾我の十郎を討とめ、高名三度の都合あふて候。御契約の御馬給はらん」とぞ申しけ
る。君聞召し「それは沙汰にも聞ぬらん。しんがいを使にて汝が方へ引せし所に、朝比奈が
狼藉にてぬすみ取、行がたしらす。それ故義盛を初め三浦一黨閉門をせさせ、しんがい迄
も出仕をとどめ置つるは」と宣へば、新田大きに不興し、「いや是は御説とも覺へず。以前
君の仰には、三度の手柄仕つれ。それ迄は頼朝が預かつたりとの御意なれば、ひつきやう我
らのあづけ物。ぬすまれしとは大將の御意共存せず。馬を得ん計りに祐成を討て候間、是
非に於てお馬を、後共いはず、たつた今、給はらん」とぞねだれける。垣の外には母上、「にく
きやつが詞やな。たとへ龍馬千疋万疋にもせよ。人の大切のひざう子を、馬にかへて討たる
とは、人でなしの畜生め」と、聲を上上げてぞなき給ふ。頼朝もあぐませ給ひ「其義ならば外
の物を何にても望め」と有。新田あたりを見まはし、「然らばお馬のかはりに、此禪師坊を
申しうけ候べし」頼いやく、彼は大事の囚人、かなふまじ。頼朝が重代、ひけ切ひざ丸に

ても望め」と有る。新田かぶりをふり、「イヤ馬は四足有る物に、足も手もなき御太刀はいやにて候。ぜひ禪師坊を給はらずば、但はじめの通り松島月毛を給はるか。二ツに一ツの御返答承はらぬ其内は、まつたく此處を立ち申さじ」と、どうと座をくみ居たりけり。頼朝思案につき給ひ、「此うへは詮方なし禪師坊をとらする」と御詞もをさまらぬに、思こは有がたし」と罷立、繩きりほどこき塵打はらひ、「是々曾我の母御、疾々つれて歸られよ」母「ハツ」ト計りに手を合せ、「神か佛か新田殿、生々世々の御慈悲成は」と、忠常をおがむやら禪師坊をさするやら、行つもどりつ泣つわらふつ、うれしさ足も地につかず、暫しどよめき悦びし、心ぞ思ひやられたる。かよる所へ朝比奈の三郎、松島月毛の口をとり、御白洲にはせさんじ、朝義秀めは盗を仕り、直に立のき候へ共、思案を仕り、我と我身を訴人に罷出候。盗んだ所は罪ふかけれ共、自身そにんの御ほうびに、此馬は朝比奈が拜領致し申べし。若御聞入なくばそにん致して益もなし。いつさう元の盗人なり。和田の一門九十三騎、三浦の一黨同類をくみし、盗みを致す程ならば、恐らく鎌倉中東八ヶ國をぬすみ立、後には何を盗まうもしれ申さず。時にはかへつて我君の御損たらん。理をまけて義秀に拜領仰せ付られかし」と、恐れなくこそ申けれ。頼朝わらわせ給ひ、「朝比奈が我儘今にはじめ

ぬ事ながら、是れは餘り興がつたり。さりながら、和田一家にめんじてとらするなり」と仰せける。朝比奈かうべを地に付、「有がたしく」と御禮申し、「扱こりや新田、おぬしは近比でかいたり。あの禪師坊が命は、日本國が御訴訟しても叶はぬ所、まづかうせふと思ひ、扱此馬をぬすんだり。朝比奈と同腹中、でかいたく。サア此馬を朝比奈が引出物に和殿にやつた。是でどこもまるう成。名は朝比奈となのれ共、智慧はふかひな分別義秀。ほめてくれよ」と、どつと笑へば、我君も伺候の人々一どうに、興に入てぞ感じける。かくて大將簾中に入給へば、海野太郎行氏役所よりかけ來り、海「コレ朝比奈殿、御邊の仕方、新田は悦び成べきが、此海野は立申さず。御へんが馬を盗みし故、某召取たる禪師坊を忠常に助けさせ、あらそひの有る此馬を新田にやるは何事ぞ。それでは海野が一分たよず。了簡しなをせ朝比奈」と、いへば義秀ゑせ笑ひ、「イヤこしやくな一分だて、じたいあの馬は御へんなどには似合ず。お主たちには牛がよし。其うへあの馬は手から三度したる者に給はらんとこの御ことばに、ろくな手がらを一度もせいで、御馬を望むは經もよますに布施とるか。今でも手がらにサア此朝比奈をなけて見よ」と、大手をひろけをひまはせば、海「我まよ者の無法やぶり、かまひはせぬ」と口の内、ぶつくさくつぶやきて、表をさして逃出る。

みつせ川一浦と
三途川とかく
あはれ一泡にか
く

魂を祭る一曾我
兄弟が亡父の魂
を祭る
新精靈一在ら
ず
にかく
思切る一思切つ
て髪を切る

新田朝比奈どつと笑ひ、禪師坊おや子の人に禮義をなせば、人々も、「朝比奈の心ざし新田殿の御情敵にてはなかりけり。草のかけなる兄弟も、さぞ悦びのみつせ川、かへらぬ水のあはれ世に、ながらへて一所に有ならば、いかどはうれしかりなん」と、なを繰言のくやみ草。むかし戀草しのぶふく、ふせ屋にいざなひ歸らるよ。實にやたのしみかなしみは、定めがたなき人界なるはと、今こそ思ひしられたれ。

第五

數ならぬ身にも宿にもくる秋は、折もたがへぬ風の音。去年迄魂をまつりし身が、今年
はかけも新精靈の、たなに折しく蓮葉の、孟蘭盆祭哀れなり。いたはしや母上は、虎少
將がくろかみの、思ひ切たる姿を見て、「おもかけに立つ我子の顔物忘れする老が身に、
などは計りは忘れぬぞ」と、日のくれ夜半のあくるにも、折ふしにますなけきなり。もと
より貧家の曾我の末、なを御勘氣はつよく成、世間ひろき弔ひを、すべき使もなかりけり。
誠や菩提の知りやうは、法界の回向にしくはなしと聞ぞとて、祐成や時宗の最期場に、日
覆ひかまへ籠をまうけ、接待に天台乳花の茶を煎じ、往來の人にほどこし、一遍の回向

をうくべしと、鬼王兄弟水薪おりにくみはこべば、虎少將母上も諸共に、取茶杓柄の回向の念佛。往來の僧俗男女貴賤をわかす聞及び立ちどまり、「是廣大の功德ぞ」と、皆々茶をうけ手向をなし、一杯に喉を露し、二杯にくらきしんをあきらめ、三杯にかれたるたましひをさぐり、四杯にしろき汗をおこして平生不平のきを散じ、五杯には肌潔よく、六杯には自づから仙靈に通達し、七碗喫する其の中に、清風に乗じて不退地の雲に遊ぶと、みな禮拜して念佛す。妙なる功德と聞へけり。かよるところに編笠にて、顔かくしたる侍一人、茶をのみて回向をなし、くわい中より黄金一包取出し、「近頃殊勝千萬。たどさへ不勝手の會我殿。御兄弟にはなれさぞ不自由に候はん。貧者の御茶たどのみ申すはいかかなり」と、膝にをいて立たんとす。老母御らんじ、「お心ざしは嬉しけれ共、子共が追善にほどこす茶、あたひを受ん様はなし。返辨いたす」とかへさるよ。彼男小ごゑになり、「イヤ是は我一人の金子にあらず。鎌倉の大名衆かたぐをみつぎのため、少しづつ奉加をいたされ、集められたる金なれば、恩に被玉ふ事でもなし。平に取て置給へ」と、虎にわたせばじたいする。少將にやれ共手にとらず。「然らば御兄弟聖靈に參らす」と、さし置て逝て行、禪師坊外より歸り、つよみし黄金を取つて彼ものになけ付、襟元つかんでど

うとひつすへ、禪ぜんいづくの誰たれとはしらね共、慮外千萬なる奴やつめ哉。身こそ貧なれ伊東が孫會我兄弟が追善つぜんぞや。但しをのれは茶をうる出茶屋と見たか。先祖せんぞより此かた曾我一家が、物を賣うて商賣あきなひしたる例たがひしなし。をのれ誠の心ざしならば、たとへ一紙半錢成共、寺てらへ持參ちさんし三寶さんぼうを供養くやうすべき事。たとへ千金萬金にもせよ、群集ぐんじゆの中にて茶のあたひを取て、日本無双むさうの五郎十郎が、潔いさぎよきしかばねに泥どろをぬるか、推參者すゐさんもの。殊に鎌倉中の大名が奉加してあつめたと、エ、胸むねわるや穢けがらはしや。左程會我そがを大切たいせつに思ふならば、兄弟そんじやうが存生ぞんじやうに心ざしも有べし。など時宗が一命をも申し受けてたすげざりしぞ。祐經すけのりがるせいせいに恐れ世間をはどかり、見ぬ顔かほせし腰こしぬけ共が、なんじや此めくさりがね。兄弟の者共には忘れがたみの子供こども等あり。若もの事の有あるならば、甥共せむいに腹卷はらまきせさせ、此法師が衣えの上に鎧よろひなけかけ、坊主ぼうずあたまに兜かぶとをいたどき、瘦やせたる馬に打乗うちまて、太刀脇たちわきばさみ一陣いちぜんにすゝんで、能敵よきてと引くみ討取うちとり一方を切やぶり、かう成者の子々孫々と後代に名をとどめんと、朝暮あさゆふ念ずる我々が、諸大名の奉加を受うけ、生いたる甲斐かひが有あふと思ふか。うき世も命もすて坊主、いつの時をか待つべきぞ。鎌倉中の六名の惣名代そうみやうだいには不足ふそくなれ共、をのれが相手あつちじや遊あそばぬ」と、腕うでまくりし怒いかりしは、すさまじかりける勢いきほひなり。彼者笠をとつて捨て「チ、頼

かう成者云々一
斯様に敵討ちた
る人の子孫

勸請—せうめい
荒神現人神の御
魂を移して祭る

もししく。必粗忽せらるよな。某は頼朝公の御近習大友の一法師、元服して大友の左近の將監に任せられ、若君へ付られ、只今は頼家公につかへ申すよ。然るに祐成時宗前代未聞の勇士とて、君御感ましく、せうめい荒神あら人神と齋ひ、富士の裾野に社を立、兄の宮弟の宮勸請有、近日御社參との御事なり。其節兄弟の忘れ形見のをさなき者共、所領を下され頼家公の御伽に、召出されんとの御内意なり。然れ共かたく久敷沈淪流浪の家、俄に用意見苦かるべし。沙汰なしに此黄金手に入れをけと、忝なくも頼家公御建設の尊意なり。必粗忽し給ふな」と、いひもあへぬに禪師坊、「あつ」とかうべを地につくれば、老母をはじめ虎少將、鬼王兄弟まろび出で、「世に有がたき御惠、いつの世にかは忘るべき。是に付ても祐成や時宗が浮世にながらへ、此仰を同じ様に承る程ならば、いかに嬉しかるべき」と、先き立つ物は涙なり。大友重ねて、「御内意なれ共此首尾にて、斯様に顯はし申す上は、此通りを披露いたし、追付御社參有べき間、其節罷出でむかひ、御目見へ候べし。委細は和田殿秩父殿より申さるべし。先づおいとま」と有ければ、眞只御前をば宜敷様に」と禮義をのべ、いとま乞つゝ用意有。歎きはうせて目出度さの、曾我の出世の悦びも、太平の代の秋津君。仁義の道や白旗の、裾野の社に御參詣。忝なくも大將御父子

めしぐー召具する人々

重陽—九月九日
曾我菊—承和菊
にて黄菊の一種
安堵—本領に安堵せよとの御敬書

木瓜—曾我の紋所、空にかく

歌の歌仙—三十六歌仙の額

曾我兄弟の神靈に、御手を合させ玉ひければ、近習外様のめしぐの人、残らず法施をささけられ、取わき今日は重陽の、折に幸ひ曾我菊や、種たやさじと若共に、河津の本領三萬町、安堵の御判のすみ色も、ふかきめぐみに取そへて、御恩をになふ木瓜の、紋も再び榮へける。目出度かりける三置しだいなり。

歌仙

さて其後頼朝公はいでんに立出で給ひ、數の歌仙を御らんじて、「いかにかたぐ聞玉へ。何れの宮社頭にもみな萬民の宿願にて、繪馬歌仙をかけ奉る。中にも此三十六枚の歌仙と申すは、是ならびなき名歌たり。あるとのみ計りにて事の心をよもらじ。いでく此歌のしなぐを、あらまし説ひて聞すべし。こなたへ參れかたぐ」と、一々次第にのべ給ふ。「そもく、此歌仙といつば、中比四條の大納言公任といひし人、選びをかれし人々なり。歌仙と書てはうたのひじりと是をよむ。されば三十六人の歌人は、世にたぐひなき名人なり。先左の第一ばんは柿の本の人丸。此人丸と號すは、忝くも大聖文珠の化身たり。和歌の道をひろめんため、かりに人間とあらはれ、奈良の帝にみやづかへ、位正

私誓一衆生を濟
度する佛の誓
事 狂言云々一歌の

ナツシメー和ぐ
る

三位を経たり。一代の詠歌の数、五千三百八十首、みな眞言の祕密なり。中にもことよに書れたるは、ほのくくと明石のうらの朝ぎりに、しまかくれ行く舟をしぞ思ふ。此歌の口傳様々なりと申せ共、是は神道の根本佛果菩提のめうもんなり。人間生死の有様を浦漕舟になぞらへ、弘誓の海をわたり涅槃の岸に至るべき、其行末を思ひやる、深き心をよまれしなり。狂言綺語のたはぶれも讚佛乘の因縁とは、よくこそ是をつたへたれ。扱右の第一は紀の貫之の詠歌に、櫻ちる木の下風はさむからで、空にしられぬ雪ぞふりける。此貫之と申すは、延喜のみかどの御時に、歌のほまれ世にたかく、御書所を承り、住吉玉津島蟻通しの明神にも、あひ奉る歌人なれば、是又凡人ならずとて、かの人丸ともる共に、和歌の祖師とぞさだめらる。歌の心を尋ぬるに、嵐のさそふ山ざくら、こかけの雪とつもれ共、てる日のひかり曇らねば、空にしられぬことはりの、實にたぐひなき名歌哉。左の二ばんは是も又、同じ延喜の御宇に有りし凡河内の躬つねなり。詠る歌には、住吉の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白なみ。歌の心ははま松の、こずゑのひとき沖つ風、立白浪もおとそへて、神の心をすどしめの、さつくの聲とやきこゆらん。右の二ばんの歌人に、伊勢といへるは女なり。書れし歌は、みわの山いかに待みん年ふとも、

しるしの杉―古
今集、我庵は三
輪の山もと懸し
くばとぶらひ來
ませ杉立てる門
の歌によれり

たつき―たより

尋ぬる人もあらじと思へば。歌のしさいを尋ぬるに、是は批把びひの左大臣仲平なかつらと申せし人の、心がはりをうらみつよ、大和の國へおもむく時、よみて送りし歌なれば、儲こそ所も三輪みわの山、しるしの杉すぎのふる事を、我身のうへによそへたり。儲左の第三は中納言家持ちゅうたけん やかもち。春の野にあさる雉子きすのつまごひに、をのがありかを人にしれつよ。とは春の狩場かりばにすむ雉子きすの、草葉くさばに身をばかくせ共、妻こひかぬるをりくは、けいくほろよとなく聲こゑに、よその袂たもともぬれぬべし。右のかたの第三は山の邊べの赤人あかひとのつらねしうたは、和歌わかの浦うらにしほみちくればかたをなみ、あしべをさして田鶴たづなきわたる。實けに此浦このうらのならひとて、女浪めなみはたよで片男浪かたをなみ、蘆邊あしべの田鶴たづの立さはぎ、行衛ゆくへもしらぬこころなり。在原あはらの業平なりひらの歌うたのことばは、世のなかにたへてさくらくらのなかりせば、春はるの心はのどけからまじ。と花に心を染川そめがはのふかき情なさけをあらはせり。僧正そうじやうへんせう遍照へんせうの詠歌えいかには、す忍しのぶの露もとのしづくや世よの中の、をくれさき立ためしなるらん。實けに世の中の有様ありさまは、今日けふは人のうへ、あすは我身を白露しらつゆの、風まつ程の命いのちぞと、思ひしれとのをしへなり。猿丸さるまる大夫は、遠近とんちんのたつきもしらぬ山中やまなかに、おほつかなくも呼子鳥よびこどりかな。とたよりのなき身をおく山の、鳥の心にとへたり。小野の小町このちやまが、わびぬれば身をうき草のねをたへて、さそふ水あらばいな

かづらきの神—
空鏡醜しとて夜
のみ出て衆の岩
橋を作りし神
みしめなは—見
ると注連とかく

あきな—
かく

花に鳴鶯云々—
古今集の序にあ
る句

んとぞ思ふ、とよみけん歌の心こそ、ことに優れて哀れなれ。むかしの花の一盛り、世に
おちぶれし行末は、水のうへなる浮草の、さだめかねたる身のほども、思ひやらるよこ
とばかな。こよに左の十六に、藏人左近と聞ゆるは、是も女の歌仙なり。いは橋のよる
のちぎりもたへぬべし、あくるわびしきかづらきの神。と詠るころは、いにしへの役の
行者の、かづらきやくめちにかけし岩はしの、渡しもやらで中々に、神にうきめをみし
めなは、ながきうらみをむすびける、夜のちぎりぞ哀なる。大中臣の能宣が、千とせまで
かぎれる松も今日よりは、君にひかれて萬代やへん。と子の日の松の行末も、久しかる
べき例しごと、君を祝ひし名歌なり。十八ばんのをはりに、左に平のかね盛が詠歌を
見れば、くれて行秋のかたみにをく物は、我もとゆひのしもにぞありける。と老をいと
ひてよむ歌も、たゞ我々が身のうへに、思ひしらるよことはりの、むかしにかはる黒髪は、
霜のおきなと衰へて、過る月日はあづさゆみ、ひくにとまらぬ世の中の、生老病死の
有さまを、悟れとよめる心なり、右のとまりは中務、是こそ伊勢がひとり姫、母にとらぬ
名人なり。つらねしうたは、黄鳥のこゑなかりせば雪きへぬ、山里いかで春をしらまじ。
と實に心なき鳥類も、時を忘れぬ初こゑに、四方の春をやしらすらん。されば花に鳴鶯

水にすむかはづのこゑ、何れか歌をよまざるや。神も佛もをしなべ納受有は此道なり。ヤ
ア弓馬きうばの家に生るゝ共、歌の道をもたしなむべし」と、一々次第にかたらせ玉ひ、すぐに
還御くわんぎよなされける。今にたへせぬ大日本、王法佛法國法は、萬劫まんごふふる共よも盡つぎじと、貴賤きせん
上下お押しなべて、悦えつびの眉まゆをぞひらきけり。